１９９８年１２月２４日
国 民 生 活 セ ン タ ー

熱くないのに症状は深刻！　暖房具による低温やけど

冬本番、穏やかな暖かさが心地よい電気あんかや湯たんぽなどを使う人は多いだろう。しかし、これらの熱くない、やけどをしそうにない温度の商品でやけどをした（低温やけど）という危害情報が、1993 年から 98 年度（11 月現在）までの約５年半に国民生活センター危害情報システムに１８７件報告されている。

そこで、使い捨てカイロやあんか、電気毛布など暖房具を使うことが多くなるこの時期に、低温やけどについて注意を呼びかけることにした。

１．低温やけどとは

触っていても暖かく気持ちのよい 60℃くらいの温度でも 1 分間圧迫を続けるとやけどする。これが、「低温やけど」で、50℃でも 3 分間圧迫を続けると低温やけどになるといわれる。また、42℃でも 6 時間接触すれば細胞が変化するとの実験報告がある。低温やけどは、皮膚の表面はわずかなやけどに見えても、内部が壊死してしまうこともある。そうなると軟膏による治療では数ヶ月かかり、手術が必要となることもあり、治療が大変になる。

2．事故の概要

（1）毎年、必ず起きている

93 年度：31 件、94 年度：28 件、95 年度：49 件、96 年度：46 件、97 年度：29 件であり、毎年、同様の事故が起きている。98 年度はまだ冬場を迎えていないため、11 月現在、４件であるが、今後増加するものと予想される。

（2）65 歳以上の高齢者が全体の３５％を占める

やけどをした人の性別は、男性 78 件（41.7%）、女性 109 件（58.3%）で、女性が男性の 1.4 倍である。

年齢別では、65 歳以上の高齢者が 65 件（65～74 歳の前期高齢者 31 件、75 歳以上の後期高齢者 34 件）で全体の 34.9%を占める。次いで、10 歳代が 26 件、以下、40 歳代 20 件、50 歳代 19 件と続く。（図１）

（3）やけどするのは、足・腰・臀部と下半身が多い

どこにやけどをしたかでは、足が 125 件で最も多く、全体の 66.8%を占める。次いで、腰部・臀部が 38 件（20.3%）で、これら下半身で全体の 87.2%を占める。

（4） 皮膚移植手術をするなど深刻なやけどが目立つ

通院・入院を要したケースが 148 件で、全体の約 8 割を占める。病院情報のみについてみると、145 件中 33 件（22.8%）が中等症（入院を要する状態）である。通常の病院情報の場合は軽症が多く、中等症は 10%程度にすぎない（97 年度の例）。一度低温やけどをすると、重い症状になる傾向にあることがわかる。（図２）

図 1 年代別件数

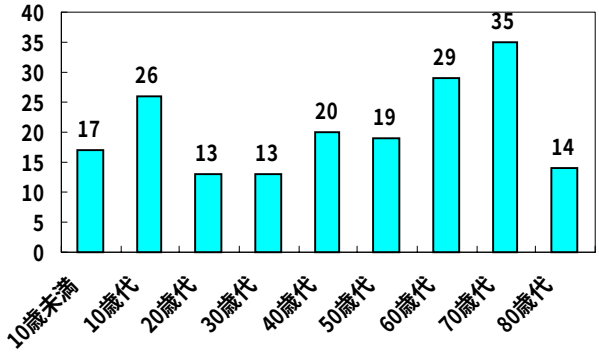

図 2 危害程度別件数

＊この情報は、全国の消費生活センター及び協力病院から、国民生活センター「危害情報システム」に報告された事故情報を分析したもので、消費者に被害防止のために注意を促すことを目的に提供するものである

（5）どんな商品で低温やけどが起きているか

使い捨てカイロが最も多く 67 件、次いで湯たんぽが 40 件であり、以下、電気あんか・あんか 37 件、こたつ 12 件、電気カーペット 8 件と続く。

商品 別件数

商品 名	件数
使い捨てカイロ	67
湯たんぽ	40
電気あんか・あんか	37
こたつ	12
電気カーペット	8
電気毛布	6
ファンヒーター（＊1）	5
その他（＊2）	12
計	187

＊1：石油・ガスとも　＊2：足温器、バス・鉄道の座席、保温便座など

（6）どういう場合に起きているのか

①電気あんか、湯たんぽや電気毛布など通常、睡眠中に使用するもので、寝ているうちに気づかずにやけどしていることが多いが、睡眠中には使用しない商品（104 件）でも、寝ていてやけどする例が 31 件（29.8%）ある（例えば「こたつでうたた寝をしていて」、「ファンヒーターのそばで寝ていて」やけどをしたなど）。

②糖尿病の患者や身体が不自由な人が低温やけどをし、ひどくなる例が目立つ（糖尿病等がわかっている 10 件中５件が入院を要するなどかなりひどいやけどである。この中には手術した人もいる）。

（7）主な事例

【事例１】使い捨ての靴用カイロを靴下を履いた上から両足のつま先に貼って外出した。約 30 分で帰宅したが、そのまま 5 時間くらい家の中で過ごした。するとつま先に水泡ができ、翌日病院で診察を受けたところ、低温やけどと言われ、右足薬指の先 5㎜ くらいを切断、大腿から皮膚を移植した。（96 年・60 歳代・男性）

【事例２】ポリプロピレン製の湯たんぽをバスタオルに包んで 1 日 8 時間で 7 日間使用した。右足首の上にやけどがあり、学校の保健室で低温やけどと言われた。病院に行ったところ、骨には達していないが、皮膚がぐにゃぐにゃになっていると言われた。（97 年・７歳・女子）

【事例３】あんかを入れて寝ていたが、朝、足にやけどをしていることに気づき、病院で治療を受けた。糖尿病で膝から下の感覚が鈍くなっている。（96 年・50 歳代・男性）

【事例４】電気カーペットの上に座布団を敷き、２か月の女児を 2 時間くらい寝かせていたが、ふと見たところ右足に水ぶくれができていて、病院で治療した。（96 年・2 か月・女児）

【事例５】風邪薬を飲んでトイレに行き、保温便座に座ったまま長時間眠ってしまい、3 度のやけどを負い、入院した。（95 年・50 歳代・女性）

３．消費者へのアドバイス

（１） 低温やけどを防ぐために

①それぞれの商品の注意表示をよく見て、使用時間、使用温度など使用方法を守る。

②比較的低温でも長時間圧迫すると低温やけどとなるので、頻繁に部位を変える。圧迫しない。

③使い捨てカイロなどを長時間身体の１か所に固定しない。また、睡眠中には使用しない。

④湯たんぽや電気あんか、電気毛布などは睡眠中という長時間の間に知らないうちにやけどしてしまうことがある。寝床を暖めたら電源を切ったり、目盛を低くしたり、身体から離したりすること。常に「低」など下の目盛で使うようにしたい。

⑤電気カーペットの上では寝ない。また、カーペットに乗ったときに暖かいと感じるようでは高すぎといわれる。座ると徐々に暖かくなってくる程度が適している。

⑥どんな商品でも熱く感じるようになったら、すぐに使用をやめる。

（２） 病気のある人、乳幼児や高齢者は

① 低温やけどは、身体の動きの不自由な人や病気やけがをした人たちによく起きるといわれているので、これらにあてはまる人は、特に注意する。酩酊熟睡の場合にも起きやすいので同じく注意する。

② 糖尿病など血管の状態が悪くなる病気の人が、低温やけどをすると治りにくいので注意する。

③ 乳幼児や高齢者、自分で温度調節ができない人、皮膚感覚の低下している人が、暖房具を使うときは周りの人間が温度などに注意を払う。

（３） もし低温やけどをしてしまったら

低温やけどは水で冷やしても意味がない。見た目より重症の場合があるので、早めに専門医の診察を受ける。

（本件連絡先：国民生活センター消費者情報部 TEL ０３－３４４３－１７９３）

<title>熱くないのに症状は深刻！　暖房具による低温やけど</title>